

No.48

春号 2026年5月発行

慶應藤沢

イノベーションビレッジ通信

SFC-IV

慶應藤沢イノベーションビレッジ(SFC-IV)は、中小企業基盤整備機構が大学および地域と連携して運営する起業家育成施設です。起業家や新事業に取り組む事業者の立ち上げ期を総合的に支援します。

## 【注目企業インタビューシリーズ】 《第6回》

〈207・219・220・221〉

一般財団法人 SFC フォーラム  
General Foundation SFC Forum

一産学協力の新たな可能性を創造する一

事務局長 廣川克也氏



SFCフォーラム HP



コラボ神奈川@YOXO BOX

Keio Fujisawa Innovation Village

SFC-IV



SFC-IV:Facebook

## 注目企業インタビューシリーズ

### 《第6回》〈207・219・220・221〉一般財団法人 SFCフォーラム

事務局長 廣川克也氏

支援機関として関係が深いSFCフォーラム様。そのキーパーソンであり、時代に合わせて「組織の在り方」、「目的」を常に見つめなおす廣川事務局長から、ご自身のお考えや価値観を含め、経歴や組織の歴史、活動内容を伺いました。（2026年2月4日取材）

（事務局長 廣川克也氏）



#### 【財団様について】

##### —SFCフォーラムについてお教えてください

世界の人材を一堂に集め、地球視点で世界最高水準の教育研究を行おうとする慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）と、グローバルに活動する産業界や他大学等とのコラボレーションを一層発展させること、より良い未来を創造するために、SFCに存在していた各種支援機能を集約し、機動性、柔軟性を備え、かつキャンパスと密接に連携した活動を行うこと、などのために、2012年に一般財団法人として発足しました。

設立の目的は、

- （1）高い信頼性を担保しつつ、自立性、柔軟性、機動性を備えた組織を構築すること
- （2）SFCおよびアカデミアとの密接なパートナーシップにより、社会への貢献を果たす存在となること
- （3）SFCの理念に基づき、教育プログラム、研究およびリサーチ・アドミニストレーション、産学官連携プロジェクトなどの推進を行い、SFC コミュニティの発展と持続可能な成長をサポートすること
- （4）アカデミアと社会との間にオープンなコミュニケーションによるプラットフォームを提供し、相互の関係を強化しながら、共通の目標を達成するための取り組みを推進していくことなどです。

現在は、「慶應SFC 学会＝研究者の集団」・「産学官連携コーディネーター＝研究者と企業の橋渡し」・

「インキュベーションマネージャー＝学生や研究者の起業支援」・「URA＝研究活動の裏方」などを引き受けています。

大学はあくまでも研究教育・人材育成機関であり、非営利・公共性の高いものです。一方で活動の原資を確保する必要があり、営利事業は当法人が担うという役割を果たし、これを1箇所で行うことで円滑な情報連携やノウハウ蓄積を図っています。

##### —財団設立の経緯を詳しく教えてください



（支援者の集まりで）

そもそも、任意団体としての活動が1990年から始まっていました。1990年はSFCが開設したときですが、学部や研究テーマを社会の方々、特に企業経営者に知ってもらおうことが、その後の卒業生の就職や共同研究につながることを初代学部長が意図され、昼食会形式でディスカッションを行いながら企業向けに先生方の最先端の研究成果を発表する機会をつくりました。

この活動が徐々に大規模になり、ガバナンス強化の必要性も高まったため、2010年頃に「中間法人を作ろう」という話が出て、2012年4月に一般財団法人を設立、登記しました。一般財団法人という形態にした理由は、経済的に自立した法人を目指す以上はNPOとは異なること、株主を持たない自由度があること、将来的に公益法人を目指す選択肢を残しておくことなど、戦略的に検討しました。

##### —立ち上げの発足人やキーパーソンはいましたか

当時学部長だった村井先生、國領先生、大学院の院長だった徳田先生です。このお三方には財団設立の発起人になっていただきました。

##### —事務局長 廣川様のご経歴をお教えてください

1993年に社会人になり、そこからメガバンクに11年間勤めていました。その後2年弱ほど北海道大学の知財担当（先生方の特許をライセンス化する業務）をしたのちに2005年からSFCに関わっています。銀行員時代は、品川支店、五反田支店などで勤務しました。その後、経済産業省のベンチャー企業支援部隊である新規事業室（当時）に出向となり、銀行や商社の若手が集められた組織に二年半ほど在籍しました。そこでの業務は、ベンチャー企業が融資を受ける際に債務保証を行う保証業務と、ベンチャー支援施設の取り組みを日本全国に広げるための調査業務を行うものでした。



当時は「大学発ベンチャー1,000社構想」を掲げる平沼プランが進められた時期で、大学発ベンチャーを支援する機運が高まっていました。調査業務の内容としては、既存の施設や大学に訪問して、施設の設立経緯、設備、人材、支援活動などの具体的な中身や、それによってどんなベンチャー企業が生まれているのかについて詳細に事例を集め、他の支援者の参考になるような内容をまとめて報告書を作成しました。

その際に海外の大学も訪問したのですが、どの大学も密接に連携したNPOや株式会社を持っており、それらのおかげでテクノロジーライセンスが円滑になったり、学校法人自体は営利を求めずとも、関連組織がガンガン利益を出して研究施設やインキュベーション施設を建てたり、優秀な学生を集めたり、そこからスタートアップが生まれたり、その会社に投資をしたり、研究費を出したりと、大学にさまざまな形で還元している状況がわかり、その後のSFC フォーラムの設立や活動内容の検討につながったと思います。

結局行員時代の半分ほどをスタートアップ支援担当として過ごしましたが、融資をするためにヒアリングを行うにあたり、ある程度技術的なことも分かるようになりました。大学においても、企業と共同で活動したい、企業に研究成果をライセンスしたいというニーズがあるので、研究内容、成果の特徴を詳しく教えていただくことがありました。このような経験が、スタートアップ企業が何に困っていて、どのような研究成果・特許があると開発が進むのか、事業が動くのかを理解したり、情報提供するのに非常に役立っています。そして、その経験を活かして転職し、2004年に設立された北海道大学の知財本部にて研究者の特許を企業にライセンスする担当として2年弱勤務しました。



(SFCのIM時代 SFC-IV IM室内)

その後、SFC-IV設立直前である2005年12月にSFCのインキュベーションマネージャーの公募があり、その選考を受け、採用していただきました。実際に活動してみると、大学職員のように組織の人間として活動するにはやや動きづらく、また、大学という組織は学費・研究費・寄付しか受け取ることができないため持続可能性が確保しにくいと感じました。そこで、海外大学の事例を参考に、何かしら外部の法人を作って営利活動ができると良いと思いました。大学職員は異動によりポストが変わり、知見が個人に貯まりにくいという課題に対しても、外部の法人で正社員として雇用すれば長く活動でき、ネットワークも広がり、質の高い研究支援を実現できます。さらに、大学ではイベント対応等において業務委託で外部企業に業務を発注することがあり、それをこのような法人が担えば安価で対応でき、結果的にキャンパスのコスト削減にもつながります。

### —財団を作る時に何か壁はありましたか

"SFC"を名前をつけることを認めてもらうのに時間がかかりました。当時、こちらとしても活動内容が明確では無かったので、「この組織は大丈夫なのか」と問い合わせが来たこともありました。法的には学校法人与自然の法人ですし認可を取る必要も無いのですが、「怪しい組織ではありません」ということで、当時の学部長に理事になっていただきました。2年目以降は、名誉教授の方に役員になっていただいていた信頼性を担保しています。

### —廣川様が思う組織になってきていますか

もっとできたかなと思います。例えば、オープンイノベーションの流れの中で、神奈川県だとBAKの取り組みがありますが、あのようなコミュニティは、以前から実施している昼食会のような事業を活性化させることで、より多くの企業を集める大規模な活動として当法人でも実施できたのではないかと思います。SFCには面白い学生、先生がいらっしやるので、SFCと比較的自由に幅広く連携できる立場をフル活用することで、SFCも企業も地元も盛り上げるための新しい仕掛けを自由に実行していけるとと思います。



### —一番何が足りないと思いますか

コロナ禍で2年間ほど学生へのアプローチができず知名度が一気に下がってしまいました。ほぼゼロからの仕切り直しになってしまったので、以前のように授業に参加するなど、学生、先生への認知度を高めることを進めたいと思います。起業に関心がなくなったり、起業したい学生が減っているわけではなく、接触回数の問題だと思います。「メンター三田会」という起業を志す学生を支援する同窓会組織があり、週に数名からの支援の依頼があるのですが、その半分はSFCの学生です。そもそも、起業やビジネスに関心がある生徒さんがSFCを選んで進学しているので、タレントは揃っていると思います。

学生へのアプローチ方法としては、起業に関心のある学生が集まっている新事業創造系の先生の授業(授業により参加人数は20~100名)がメインです。先生方はお忙しいので、ビジネスに関する相談相手としてSFCフォーラムが受けるスキームとなっています。また、学生団体経由も一つのルートです。

## 【活動内容について】

### —それぞれの事業について教えてください

#### 活動内容① 講演・研究発表事業

##### ・SFCフォーラム会員制セミナー

会員企業の経営層を対象とした、産学交流・セミナー事業を運営しています。経済、政治、外交、文化、技術など、幅広い分野の最新の知見を提供するとともに、産業界のリーダーと深い議論を行う場として運営しています。具体的なプログラムは、定例昼食会（年5回）、研究セミナー（年3回）、経営サロン（年1回）、賀詞交換会（年1回）にご参加いただけます。参加者は十数名から30名くらいです。ニュース性、話題性というよりも、社会を一步先取りしているテーマを選定すること、産業界との関わりを示すことなどを企画運営で重視しています。

##### ・研究発表・シンポジウム開催

SFCの研究プロジェクトが主催する研究成果発表会やシンポジウムの企画運営を支援しています。また、産業界、公的機関と連携したセミナー等の企画運営も行なっています。基本的にはテーマ設定は先生方が決定され、我々は集客や広報など、いかに多くの方に参加いただくかについて工夫しています。

#### 活動内容② 新事業創造支援事業

##### ・ベンチャーインキュベーション

SFCの起業家（学生、卒業生含む）への支援サービスを提供しています。慶應藤沢イノベーションビレッジ（SFC-IV）と連携しています。

##### ・投資事業組合管理業務

SFC関連ベンチャー企業を支援するための投資事業組合を運営しています。シード段階のベンチャー企業に500万円～3,000万円までの投資を行います。

特に領域は絞らず、現在はICTを使ってさまざまな課題（不妊治療、フードロス、アパレル事業の廃棄物問題、外国人採用）などに取り組む会社に投資しています。投資を行った注目企業としては、Synflux 社が最近大型の調達と大手との連携を発表しました。主に SFC 発、慶應発の案件であること、社会課題を技術やノウハウで解決する意義ある取り組みであり、社会性と経済成長性を両立しようとするものであること、などを選定基準としています。

### —「コラボ神奈川」について詳しく教えてください

当法人は、神奈川県が進める起業家支援のプログラムであるSHIN みなとみらいの運営事業を担っています。この一環として、県内起業支援者や起業家の交流の機会を創出しようと企画したもので、年に4回のペースで開催しています。定例開催で「来れば誰かに会える」という空間を作り上げ、リピーターも多いと思います。



エレベーターピッチ

テーマについては、さまざまな立場の人と議論するなかで興味深い話やトレンドを掴んで設定しています。目的としては、支援者同士が儀礼的な関係ではなく、つながりを持ちネットワークが構築されていることで同じ県内でまとまったコミュニティを作るためです。起業家支援メニューはどこにでもありますが、支援者支援は珍しく、その目玉コンテンツとして支援者も幸せになる場所づくりを目指しています。

### —現在の事業のご状況や、感じている課題はどのようなものでしょうか

請け負う業務内容がやや俗人的になっているところ。これを解消するため、2024年度から積極的に新規雇用を進めています。新しい人には、新しい視点、新しい課題感を持って、新たな取り組みを始めてほしいと思っています。

もう一つは、活動やコミュニティがマンネリ化していることです。会員制プログラムも35年×年5回でセミナー実績は170回を超えました。会員企業同士が仲良くなっていることは良いのですが、新しい会員を見つけることがすごく大変でメンバーが増えない状況です。有料でセミナー、経営合宿等のコンテンツを提供していますが、昨今は最先端のテーマであってもオンラインで視聴することができるようになっており、費用対効果が感じられなくなっています。

そこで、今年からの新たな取り組みとして「PIVOT」(会員数350万人)と連携して、SFCチャンネルを作成し、研究成果をアピールしようと思っています。まず今年のコンテンツは、3本配信を予定し、総合政策の先生による国際情勢、安全保障を取り上げます。

PIVOTは有料チャンネルもあり、お金をかけて勉強しようとするような、将来リーダーになる30-40代が視聴層の70%を占めるので、SFCをよく知ってもらい、将来の共同事業等につながればと思います。その中から、共同研究したい、連携したいという企業が出てくれば、より密なコンテンツを提供するにあたりSFCフォーラムの会員になっていただく。また、将来大学生になる高校生に見てもらい入学志望者を増やすことができる点や、先生にとっても研究の周知になるというメリットがあります。

実行には2年ほどかかり、「SFC監修」をつけることがいちばんのハードルでした。著名な講師を呼んで話してもらうという他のチャンネルとは異なり、SFCの公式チャンネルと分かるようにしたかったんです。監修をつけた時のリスク、メリットなどを整理しました。

## —今後の事業の方向性や、中長期のビジョンをお教えてください

一事業体として自立すること、持続的な成長を図ること、多様性ある組織であり、多様性ある働き方ができる組織を目指すことなどにより、「学校法人とは全く独立した存在でありながら、信頼性を持ち、経済成長を実現することで、大学に諸々のリソースを還元できる存在」を実現したいです。

## —ありがたい組織の姿をお教えてください

現在の組織体制としては、2026年2月時点で、正職員12名、契約社員5名、そのほかに謝金ベースの研究者もいます。家庭の事情などを考慮し、職員は都合の良い勤務地(首都圏、三重、宮崎)で働けるようにしています。フルリモート・フルフレックスをはじめとして就業規則の整備を行い、どんな状況でも誰でも働ける組織体制を作っていますし、今後新たな要望があればそれに応じて検討していこうと思います。今の業務量に対してひとまず人数は足りているので、拙速に組織規模を大きくする予定はありませんが、その時々々の要望や時代に合わせて変化していければと思います。

## —SFCフォーラム人として一番大事にしていること、目標、メッセージをお教えてください

大事にしていることは、それぞれの物事において個別に「大事なこと」や「目的（誰のためにやるのか、何のためにやるのか）」を考えて、正しく行うことです。また、『許可がいる』など行動が必要なときは自分から口説きに行くこと！

目標は、引継ぎ、後任育成を実現し、SFC フォーラムをきちんと成果を出す良い組織にしていきたいです。

世の中にはまだまだ解決しないといけないことがたくさんあると思います。起業家の人たちはそういったことを一つ一つ解決して、世の中を良くしてほしい。それに対して個人的にもフォーラムとしてもサポートするのでのびのびと活動してほしいです。

## 【インタビューの感想】



一緒にSFC-IVを盛り上げてくださっているフォーラム様の、設立経緯、そして「大事なことは何か」「誰のために、何のためにやるのか」を常に考える廣川さんの強い思いが反映された組織であることを知る機会となりました。大学から独立した組織として、新しい取り組みや組織体制が進化する様子を今後も傍で感じられればうれしいです。

また、私事ですが、4月で広報課へ異動となりました。SFC-IVの担当職員として、入居企業の皆様のことをもっと知りたい、そして自分の興味のある広報関係を通して何かできないか、という思いでIV通信を復活させ個人インタビューを含むコンテンツを発行してきました。インタビューをした皆さん自身の人生観や価値観に焦点を当てたインタビューをさせていただき、皆さんが大事にしていること、それが起業・経営につながった背景を知ることができ興味深かったです。常に施設にいるわけではない私にとって、より入居企業様のことを身近に感じ、何かお役に立てないか、と思わせる機会となりました。お忙しい中ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。部署は変わりますが、今度は中小機構の広報担当として従事いたしますので、引き続き皆様のごことをご支援させていただければと思います。（中小企業基盤整備機構 関東本部 峰本）



## <過去のインタビュー風景>



第1回 DigitalArchi様



第2回 TOMOMI RESEARCH様



第3回 ショーナン様



第4回 湘南藤沢マイクロバイオ  
&コンサルティング様



第5回 パワービジョン様

## 【編集・発行】慶應藤沢イノベーションビレッジIM室

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤4489-105 TEL:0466-49-3910 FAX:0466-49-3911

E-mail:sfc-iv-info@smrj.go.jp SFC-IV HP:http://www.smrj.go.jp/incubation/sfc-iv/